

世阿弥「花鏡」における生涯学習論

近 藤 裕 子

〔抄録〕

世阿弥は能楽に関する理論的考察を行った書物を数多く残している。それらは能の世界だけに通用するものではなく、現代の教育にさまざまな示唆を与える理論であると言えよう。例えば、亡父親阿弥の口伝を記述した『花伝書』における稽古は、理論と実践の統合されたものとしてとらえており、また人にはその年代や時期に応じた教え方や学び方があると説くなどは、今日の教授－学習過程に通じるものである。

世阿弥自身の芸得を記した『花鏡』の中には、稽古を通じて能を修得する過程における生涯にわたる修業の重要性、今日の生涯学習論に共通する内容が記述されている。世阿弥は『花鏡』の中で孔子の言葉を引用して「古きをたずねて新しきを知るひところ、師と仰ぐ人だ」と説いているが、筆者もこの言葉にもとづいて古いものから今日の生涯学習論を考察した。

キーワード 花鏡, 世阿弥, 生涯学習論, 教授－学習過程

はじめに

世阿弥が記述した書物の中に現代の教育に通じる教育に関する内容を見ることができる。例えば『風姿花伝』の内容は、アメリカから導入され日本の看護に活用されている看護論と類似している⁽¹⁾。池田は『風姿花伝』⁽²⁾、『至花道』の内容から教育実践にかかわる根本的原理を明らかにするとともに、現在の教育心理学の分野における研究課題を求めようとしている⁽³⁾。橋尾は、『花鏡』の中に記されている「機」について、教育学の立場から考察を加えた⁽⁴⁾。

室町時代に書かれた能楽書が、なぜ現代の教育学や教育心理学の立場から論じる価値があるのか。

『花鏡』は、世阿弥が「秘伝である、口外無用である」と、後世に能の修得方法を伝えるた

めに残した書物である。そこには学ぶ者と教える者と観る者の三者の立場から、能の極意を極める修業の内容が書き記されている。この三者の立場、すなわち教える者はどのように教えるかと学ぶ者が修得しやすいのか、学ぶ者は何をどのように学ぶことが重要なのか、観客はどのようなことを演じる者に求めているのか、観客の要求に応じる至高の芸を修得するには教える者と学ぶ者は、どのように教授し学習すればよいのかなどが、能のわざを修得する過程から論じられている。そこには現代に通じる教育論を読み取ることができるし、生涯学習への示唆も得られると考える。特に『花鏡』の内容の根底には、日本人の行動や心情を十分に理解した教え方や学び方による修業のあり方が記述されていると考えられる。それは能の技術や技能を体得する方法（修行）が、現代でいう教授－学習法に通ずるものがあると言えるからである。

ここでは、世阿弥が自身の芸術論として記述した『花鏡』の「奥段」を取り出し、そこに書かれている教育論または生涯学習論について考察し、世阿弥の能楽書が今日の生涯学習の考え方にどのように関連するかについて検討しようとするものである。

1. 「花鏡」における教授－学習過程

『花鏡』は、世阿弥が長男元雅に伝えたと言われている能の修行書である。題目6ヶ条と事書12ヶ条より構成されている。

題目6ヶ条とは「一調二機三声」、「動十分心 動七分身」、「強身動有足踏 強足踏有身動」、「先聞（後見）」、「先能其物成 去能其態似」、「舞声為根」であり、事書12ヶ条とは「時節当感事」、「序破急之事」、「知習道事」、「上手之知感事」、「浅深之事」、「幽玄之入堺事」、「（劫之入）用心之事」、「万能縮一心事」、「妙所之事」、「比判之事」、「音習道之事」、「奥段」である。

世阿弥は『花鏡』の書の最後に、次のように記している。

「此花鏡一卷、世私に四十有余年より老後至まで、時々浮所芸得、題目六ヶ条、事書十二ヶ条、連続為書、芸跡残所也。」

『風姿花伝』は、亡父観阿弥の芸能を修得する過程を説いたものである。そこには「第一年来稽古条々」から「第七 別紙口伝」に至るまで、能の修業によって「花」を得ることの道について、「かたち」から「型」を得る芸道の過程を記述したものである。

『花鏡』は世阿弥が40歳余から老後までの間に、芸道について悟り得た所を「題目6ヶ条」と「事書12ヶ条」にまとめた芸の形見である。これは世阿弥のオリジナルな能楽論と言える。しかしそうは言っても、『花鏡』は観阿弥の『風姿花伝』に基づきながらも、その後に世阿弥が能のより深い内容を追求した能楽論の展開が行われている。『花鏡』の文中にみられる「声の発し方」、「身体や心の動かし方」、「物まねをどう学ぶか」、「観客と演じる者との関係からみた能の演じ方」などからは、いかにすれば至高の芸を修得することができるのかを、世阿弥が能を修得した過程から体得した理論を展開している。それゆえ『花鏡』の内容は、教える者と

学ぶ者の関係の中で能が習得されていく過程の記述であるため、今日の教授—学習過程に通じるものが論じられていると考えられる。「題目6ヶ条」、「事書12ヶ条」の中から、教授—学習過程に関して書かれている2～3の内容を下記に述べる。

1) 学習の方法

学習の方法に関して「先能其物成 去能其態似」と、「知習道事」は次のように記している。

「其の物に能く成る」と申たるは、申樂の物まねの品々也。尉にならば、老したる形なれば、腰を折り、足弱くて、手をも短か短かと指し引くべし。その姿に先ず成りて、舞を（も）舞ひ、立はたらきをも、音曲をも、その形の内よりすべし。（中略）

その外、一切の物まねの人体、先ず其の物に能く成る様を習ふべし。さて其の態をすべし。」

ここでは「其の物に能く成る」というのは、基本的な猿楽芸の物まねのあり方である。例えば、老人を演じるのであれば腰を曲げ、足元も弱々しく、手もその老人になりきった姿で舞を舞うにせよ、立ち振る舞いをするにせよ、あるいは音曲をするにせよ、その者の姿になりきって行うべきである、と強調している。そしてこの「事書」の最後に、すべての人体の物まねは、まずその対象の姿になりきることを学ぶことであって、その後で個々の芸を物まねするように学習すべきであるという。すなわち能の修業は、対象となる者の姿や形になるという方法をまず学習し、そして個々のわざを似せるようにする。それは、学習する者に応じた学習の様式について学ぶことの重要性を指摘している。ここでいう物まねとは、「風姿花伝」の中で観阿弥が説いているように、ただ単にその状態をまねているのではなく、よく客観的に観察を行い、自分の内部でイメージ化を行ない、自分の身体的な特徴をとらえて演じることと解釈する。学習を行うには、まず基本的なものを学んだ後で個々の学習を始めることを強調しており、いうならば基本から応用の過程へ学んでいくという、学習の法則がこの時代に早くも言われているのである。

「至りたる上手の能をば、師によく習ひては似すべし。習はで（は）似すべからず。上手は、はや極め覚え終りて、さて、安き位に至（る）風体の、見る人のため面白きを、ただ面白とばかり心得て、初心是を似すれば、似せたりとは見ゆれ共、面白き感なし。上手は、はや、年来、心も身も十分に習ひ至過て、さて、動七分身に身を惜しみて、安くする所を、初心の人、習もせで似すれば、心も身も七分になる也。さるほどに詰まる也。」

ここにおいても学習を十分にしないで師匠に似せて演じようとする、心・身の動きが不十分となって、それ以後のわざの上達は望めないことを指摘している。能の達人と言われる者は、稽古の諸段階を極め尽くして、修業を重ねた後に到達する「安き位」、すなわち至難な芸もやすやすと演じることが出来る段階に到達しているのである。それゆえ学習は、基本が大切であり、基本を十分に理解し、それがきちんとできなければ、応用はできないということになる。現代の看護教育についていえば、日常の基本的動作、特に身体の動きが十分に理解できない学生に技術を教授する場合、正しい関節の動きを初めとした身体の動き方を学習した上で、

必要とする技術を習得するという方法をとらなければ、技術をまねることはできてもそれ以上の技術の発展性は望めないということになるのである。

2) 学習の準備性

「抑、その物に成る事、三そろはねばかなはず。下地のかなふべき器量、一。心に好きありて、此道に一行三昧になるべき心、一。又、此道を教ふべき師、一也。此三そろはねば、その物にはなるまじき也。其物と者、上手の位に至(り)て、師と許さるゝ位なり。」(後略)

「知習道事」に達人の芸位に到達するためには、3つの物がそろわなければならないとしている。その中の一つに「下地のかなふべき器量」をあげている。下地とは、素質、修行で身につけた芸力を含む、⁽⁶⁾ 相応する実力、⁽⁷⁾ 上手になれる見込み、⁽⁸⁾ 力量などと解釈されている。器量を素質と解釈している文献が多いことを考えると、下地とは物事の基礎があると解釈すれば、その者がもっている芸に対する基礎と解釈してもよいのではないか。下地があるから上達も早いというような言葉の使い方からも、学習の準備状態でできていることが、学習を促進することにつながると考えられる。『風姿花伝』の中にも、年代による稽古の種類が記述されており、「知習道事」の内容と併せて考えると、そのものを学習する準備状態が整っておれば、学習に意欲がわき、わがが上手になるという。ここでは準備状態以外に、学習に対する意欲があつて、一生懸命に学習しようとする心構えができていること、その学問の道のよい師に出会うことが、「物を成る事」の要因としてあげられている。これらは、人々が生涯にわたって学習を行おうという場合の前提条件であり、学習を継続するための重要な要因である。学習はあくまでも自らが行うものであり、他の者から強要されて始めるものではない。世阿弥によれば、学習を続けるということは、学習したいという希望を強くもっており、学習を行う分野や領域に関心を持ち、さらに良き指導者と出会うということが関連している。それらの関連性は、相互に増強され、学習の継続や深い習得にまで進行させていくのである。

3) 教授方法について

「知習道事」に次のような記述がある。

「然者、習ふ時には、師は、我が当時する様には教えずして、初心なりし時のやうに、弟子を、身も心も十分に教うる也。教へすまして後、次第次第に上手になる所にて、安き位に成て、身を少々と惜しめば、をのづから身七動になる也。」(中略)

学習に際しては、師匠は自分が演じているようには教えないで、自分が初心の時期のように心・身共に十分に働くように教えるという教授方法を述べている。

教える者は、現在自分ができているようには教えない。今のわがは、今までの芸の訓練によって自らが修得した高度のわがだからである。その高度なわがを教えることは、初心者にとっては、それを習うことは至難の業であり、「基本を知らずに真似る」ということに一致する。それゆえ教える時には初心時代にかえって、学習者の心・身が十分に働くように教えることが必要である。すなわち基本をきちんと、基礎の教育として教えることが重要なのである。

それすれば学習者は学習が終わると、自らの最終目標に向かって、だんだんと上位の学習内容を習得していくことができるようになるのである。

2. 『花鏡、奥段』にみる生涯学習の考え方

「奥段」において世阿弥は、「能を知る」ということの重要性を説いている。

「凡、此一巻、条々、已上。この外の習事あるべからず。たゞ、能を知るより外の事なし。能を知る理をわきまへずば、此条々もいたずら事なるべし。まことにまことに、能を知らんと思はゞ、先、諸道、諸事をうち置きて、当芸ばかりに入ふして、連続に習（ひ）極めて、劫を積む所にて、をのづから心に浮かぶ時、是を知るべし。」

おおよそ、『花鏡』一巻は、各論を以上で終わる。この外に私からの習い事はないはずであると書き出している。そして「能を知る」という根本の道理が本題であって、それ以外の道理は何もないというのである。「能を知る」という根本道理を理解しなかったならば、そこに書いてある内容は無意味となる。真実、能を知りたいと思うならば、専門以外のことすなわち能以外のことは捨てて、能に専念し、継続的に順序正しく学習し、研究し尽くして修行し、年功を積み上げた結果、自然と悟りが開け、「能を知る」ことができるようになるのである。

「能を知る」ということ、すなわち能を理解するということは、能を順序正しく学習し、研究することであり、さらに修行を積むことによって自然に悟り、能を理解できるようになると、専門性の追求の重要性を説いている。それには師の教えを常に心中に止めて修行することの重要性や、習い学ぶことを反復し、その後で実行することの必要性も説いている。

「先、師の云事を深く信じて、心中に持つべし。師の云と者、此一巻の条々を、能々覚して、定心に覚て、さて能の当座に至る時、其条々をいたし心みて、其徳あらば、げにもと尊みと、いよいよ道を崇めて、年来の劫を積むを、能を智大用とする也。一切芸道に習々、覚し覚て、さて行道あるべし。申樂も、習覚して、さて其条々をことごとく行ふべし。」

次に、生涯にわたって学び続けることの重要性については、次のように記している。

「秘義云、能は、若年より老後迄習徹るべし。老後まで習とは、初心より、盛りに至りて、其比の時分時分を習て、又四十以来よりは、能を少な少など、次第次第に惜しむ風体をなす。是、四十以来の風体を習なるべし。五十有余よりは、大かた、せぬを以て手立とする也。大事の際なり。此時分の習事と者、まづ、物数を少なくすべし。音曲を本として、風体を浅く、舞などをも手を少なく、古風の名残を見すべし。」

「能は若年より老後まで稽古を貫き通せ」と説き、「老後まで習う」ということは、初心から年盛りに至るまで、その時期ごとの適した芸を学習することであるというのである。40歳以降になると、その年代に応じた動きで演じ、演じる能の数を少なくしていくこと、そしてどのようにして老後の演技を見せたらよいのか、その年代にあった謡いや舞ができ、芸の花を得る

にはどのようにすればよいのかなどを説いている。世阿弥の説く能の修業は、初心から老後に至るまで、生涯にわたる稽古の必要性を強調している。それもその年代に応じた修業、すなわち学習の方法とやり方があるということを強調している。さらに「身体の動かし方」として、老後になると十分に身体を動かすのではなく、身七分動にわきまえて演じることが大切であると言う。これを現代流に解釈すれば、歳をとることによって起こる、身体機能の老化を考えた身体の動かし方を指している。そしてそのやり方（身体の動かし方）を老後において学習し、修得することが必要であると述べている。これを'60年代にポール・ラングランが提唱した生涯教育の趣旨からいえば、次のように言える。世阿弥の能芸を専門家という言葉に置き換えると、専門家といわれる者は、その年齢（地位、あるいは時代とも換言できる）に応じた、専門的知識や技術を習得することによって、その年代の花（ここでは自分の能力の開花と解釈する）を修得することができる。今日、専門職者は日々陳腐化する知識・技術に対応するために、生涯学習の必要性を真剣に考えている。しかし、このことは日本の生涯学習は、ポール・ラングランが提唱した時期からではなく、それ以前の時代から存在したことを表している。古来より日本の幽玄の世界で芸事を重んじた社会・文化の中で脈々と受け継がれ、今日に伝達されてきた学習法であると言えよう。このような事から、生涯学習あるいは教育の理論化は、室町時代に世阿弥が記した『風姿花伝』や『花鏡』などの書物からかいま見ることが可能であるということができるのである。

『花鏡』には、教授—学習に関する教育論が記述されている。そこには日本独自の文化「能」の稽古の修得過程から、どのようにすれば演じる者を生かす「能」が形成されていくのか、どのように学習することによって、至高の境地を獲得することができるのか、などについて記述されている。「能」を修得するにはものまねではなく、相手をよく観察してまねることの重要性、一つの「能」を確実に修得することによって、「能」の上位にあがること、その努力がなければ一定以上の「能」はできないこと、これらは能の修得過程には努力が必要であることが強調されている。その一方で、生来の才能が備わっていることの重要性も強調されており、自らの努力と、生まれつき持っている能力も能の修得には重要であるというのである。言い換えれば、学問の修得には、天分が備わっており、学ぶ努力を行って、至高の位置まで到達することができるというのである。しかし、今日の生涯学習論は至高の位置まで、自らの学問を持ち上げる必要性を強調してはいない。いつでも、どこでも、自ら学ぶことの重要性を言っているだけであるから、世阿弥がいうような至高の境地にいたらなくても、自らの目の小さな目標への到達を目指す生涯学習を継続することは、世阿弥が言う「能」の修行に通じるものがあるということができるのである。

3. 生涯学習論者として「世阿弥」

世阿弥は決して、自らを教育者としての立場に置いてはいなかった。あくまでも「能」の修行者、伝導者として、申楽全体の棟梁の立場から後世に伝える書物を残したのである。しかし今日、多くの研究者が世阿弥の書物の内容を分析し、学問的に考察を加え、世阿弥の能楽論即教育論あるいは学習論ととらえている。それは彼が記述した書物の内容は、「能」のわざを修得する秘伝の書でありながら、その修得過程、あるいは教える過程そのものが、今日の教授－学習過程と類似しているからなのである。さらに、「能」の熟達には「安き位」といわれる目標があり、その目標に到達するためには、段階的にわざを修得していくことの大切さ、そしてその間に幽玄や妙などを、自らの芸の中に育んでいくような修行（学習）方法は、まさに教育方法そのものであるといえる。

『花鏡』の「奥段」には、この章全体に生涯学習論が記述されている。それは「能」の修行はこれで終わりということではなく、「能は、若年より老後迄習徹るべし」という言い伝えがあると、生涯にわたる学習の必要性和学習方法についても説いている。修行をその人自身の学び方ととらえるならば、その人の年齢・時期に応じた学び方を行うことによって、人生の質を高める生活を送ることができるようにすると解釈することができる。最後に世阿弥は「初心不可忘」として3ヶ条の口伝を残している。「是非初心不可忘。時々初心不可忘。老後初心不可忘。」。最後の老後の初心を忘れてはならないということは、「命には終わりあり、能には果てあるべからず。」、すなわち、人の命には限りがあるが、能役者の芸には行き止まりがあってはならない。芸には学習を続ける限り終わりが無いということである。言い換えれば、教育には果てがない。すなわちその年代、その年代にふさわしいことを学習することは、初心、すなわち老後の初心であるといっており、人間はいつまでも初心を忘れずに学習することが重要であると述べている。

『花鏡』は、生涯にわたる学習の重要性を述べており、現代の生涯学習論にも通じているのである。未だ庶民にとって学習が困難であった時代、あるいは教育学も存在しなかった時代に、世阿弥は、能の師匠という立場から、どのように能を教え込めばよいのか、至高の芸をどのように修得すればよいのかについて、自分の体験の大成としてまとめたのである。

おわりに

ここでは世阿弥の『花鏡』について、能楽の修行の過程が今日の生涯学習論とどのように関連しているのかについて考察した。能芸者でありながら、自らの体験を通して、教育・学習方法が説かれており、現代の日本の教育にも活用できることを解明することができた。

今日の科学技術の急激な発展や社会変革などによって、教育を受ける者の質と量に変化がみられる。さらに青少年、あるいは高齢者におけるいじめなどのさまざまな教育問題がニュースとなっている。教育全般が社会に問われ、対応策を講じようとしている。そのような状況の中で、日本人による教育論として『花鏡』の一部を検討したが、レディネスの必要性や、教授法などの他に、教育には師と習う者との相互作用が重要であることについてもふれられており、教育に関して多くの示唆を与えている。さらに「奥段」には、生涯にわたる学習の重要性や、いつの時であっも初心を忘れてはいけないということが強調されており、今日の生涯学習論に通じる示唆が得られる。次には、『花鏡』や『風姿花伝』以外の日本の古典からも、現代の日本の教育に活用できる内容を検討することによって、日本人にあった教授－学習過程について考察していきたいと考えている。

註

- (1) 近藤裕子：『花伝書』の内容を看護技術の習得に応用する ― 「かたち」から「型」へ ― (『香川医科大学看護学雑誌 1 (1)』), 1997, p.1～9.
- (2) 池田貞美：世阿弥『花伝』における教育実践上の示唆及び教育心理学の研究課題 (Ⅰ) (『安田女子大学紀要 23』), 1995, p.87～98.
- (3) 池田貞美：世阿弥『花伝』における教育実践上の示唆及び教育心理学の研究課題 (Ⅱ) (『安田女子大学紀要 24』), 1996, p.113～124.
- (4) 橋尾四郎：世阿弥教育論研究序説 (『安田女子大学大学院文学研究科紀要 2』), 1996, p.1～17.
- (5) 前掲 1) p.6
- (6) 表章, 加藤周一：芸の思想・道の思想『世阿弥 禅竹』(日本思想体系新装版), 岩波書店, 1996, p.93～94.
- (7) 伊地知鐵男, 表章, 栗山理一：『連歌論集・能楽論集・俳句集』(『日本古典文学全集 51』), 小学館, 1973, p.316.
- (8) 川瀬一馬：『校注 花鏡』, わんや書店, 1974, p.36～37.
- (9) 山崎和正：『世阿弥』(『日本の名著 10』), 中央公論社, 1969, p.180.

(こんどう ひろこ 香川医科大学医学部看護学科) 1997年10月16日受理